九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

授業時間のない科目向け英語ウェブ教材デザインの試み ： 九州大学新CALL科目と新教材

鈴木, 右文
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門・言語情報学講座

岡本, 太助
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門・国際共生学講座

https://doi.org/10.15017/7153204

出版情報：言語科学. 50, pp.1-20, 2015-03-31. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：

授業時間のない科目向け英語ウェブ教材デザインの試み

―九州大学新 CALL 科目と新教材―

鈴木右文　　岡本太助

1．本稿の概要

九州大学では、1990 年代頃から、限られた人的財政的資源の枠の中で、いかに英語教育に求められる改善を実行するかが大きな課題となった。およそ英語教育に携わったことのある者であれば誰にでもわかるとおり、英語を「モノにする」ためには大変な労力がかかるものであるが、一方で日本の大学は、人的手当も含め、いくらでも資材を投入できるという環境にはなく、様々な新規事業等のために、ますます余裕がなくなってきている。こうした矛盾した状況の方程式の解として、また英語学習量の抜本的増大の方策として、九州大学では商用教材を使用した大規模 CALL 授業による自律学習が展開されてきた。この流れの中で、2014 年度のカリキュラム改定により、新入生の CALL 科目では、教室に受講者が集まることも、授業の曜日時限の設定すらもなくなった。新カリキュラムへの移行にあたって、教材も商用のものから、以前から開発を進めていた九大英語教員による独自開発教材に移行される予定であったが、諸般の事情により、この教材はようやく 2014 年 12 月 24 日から一部で試行され、本格的導入は 2015 年度冒頭からとなる。本稿では、簡単に九州大学における CALL の歴史を振り返ったあと、新カリキュラムにおける授業時間なしの新 CALL 科目と、ほぼ 1 年遅れで導入される予定の新教材とそれを運用する学習管理システムについて、その内容を紹介し、存在意義や長所について論ずる。なお、本稿は科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金基盤研究（A）「デジタル化による外国語教育の質的改革」（90116096）による支援を受けている[1]。

2．九州大学における CALL の歴史

2.1　CALL 教室の導入

九州大学には昔から LL 教室は存在したが、1997 年に九州で初めての CALL 教室が導入されることとなり、筆者のひとり鈴木右文が所属部局長より仕様策定委員を命じられ、巨額を投じた教室が作られた。詳細は鈴木（1998a）、鈴木（1998b）に譲るが、受講者用の各席にパソコンが配置され、教員から送付されるモデル画面を映すモニタも 2 名に 1 台の割合で設置された。この教室では、旧来の授業の枠の中で、教員有志がそれぞれの創意工夫によって授業を展開したが、ある特定の科目が CALL によって体系的に実施されるといったことにはならなかった。以降しばらくは散発的に利用される期間が続いた。

2.2　サイバー・ユニバーシティ・プロジェクトへの参画

九州大学で CALL 教室が導入されたのは、マルチメディア化によって外国語教育へのテコ入れ

を図ろうという全国的流れの中で実現したことであったのだが、基本的には LL の延長の道具としてイントラネットでの運用が企図されていたように思われる。しかしこの頃に、ウェブを利用して外国語授業の効果を高めようと志す萌芽的な動きがすでにあった。当時大阪大学細谷行輝教授は外国語教育にウェブを利用する研究を行っており、これに外国語担当教員のサバイバルの道を見出して、2000 年に、北海道大学、東北大学、名古屋大学、大阪大学、九州大学の代表が集まり、研究ベースで「国立五大学外国語 CU（サイバー・ユニバーシティ）プロジェクト」を発足させた[2]。2003 年には、この五大学のプロジェクトチームにより、学習管理システムの「WebOCM（ウエブ・オーシーエム）」が発表された[2]。これを機に、このプロジェクトは、国立七大学に拡大され、さらに七大学以外の有志教員を含めた形に発展した。現在では「外国語サイバー・ユニバーシティ・プロジェクト」（代表：伊藤直哉北海道大学教授、副代表：細谷行輝大阪大学教授）と呼ばれる。また、国立七大学外国語教育連絡協議会附属国立七大学外国語 CU 委員会が 2003 年 10 月 16 日に設置された[2]。これらのプロジェクト・委員会には発足当初から九州大学の教員も係わり続けている（筆者のひとり鈴木はほとんどすべてに関わってきている）。同プロジェクト・同委員会では、細谷教授による外国語教育用学習管理システムの開発を組織的に支援するため、継続的に大型の科学研究費を取得してきている[3]。これらの科学研究費等による研究グループには、国立七大学以外の教員も多く名を連ね、研究成果としてのシステムがいくつもの大学で試用された。また 2005 年には、こうしたシステムを利用した外国語のｅラーニングを促進するため、国立七大学外国語 CU 委員会の後援で、e-learning 教育学会が活動を開始した。その間に、この外国語教育用学習管理システムは、WebOCM、Web4U（ウェブ・フォー・ユー）、WebOCMnext（ウェブ・オーシーエム・ネクスト）というようにフルモデルチェンジを繰り返した。

2.3 大教室型 CALL 科目の導入

2.1 で見た流れを受けて、九州大学では、大規模な英語カリキュラムの改定のため、2006 年度に 1 学年全員を対象にした 2 つの新科目（英語 IIB（1 年後期：全学部）、英語 IIIB（2 年前期：一部学部学科を除く））を丸ごとウェブ学習で運営することとした。このため、CALL 教室は 5 室に増え、教員による教材配信機能、学生機の統括機能などが省略され、TA の配置により、ひとりの教員が多人数の受講者を複数教室で担当する体制が作り上げられた（その後の最大規模としてはひとりの教員が 300 名以上を 5 教室で担当）。授業中は主に受講者が自分のペースによって問題を解く形でドリル学習を進めた。これにより、一斉対面授業において紙の教科書を使用した場合に比べ、はるかに多くの問題を解くことができるようになった。さらに、担当教員数が抑制できるため（最終的には 1 学年 2700 人弱に対して、英語 IIB ではのべ 17 コマ分、英語 IIIB ではのべ 10 コマ分の教員配置であった）、その分のマンパワーが、かつては不可能と考えられていた少人数（原則 25 名）による英作文クラスの創設に振り向けることができ、それまでリーディングと少々のリスニングが中心であった教育内容にライティングが加わって、数年後に標榜することになる一般学術目的の英語（EGAP）という理念にとって重要な、学術スタイルのエッセイ・ライティングを目指した授業が可能となったのである。

この授業で使用されてきたのは「ぎゅっとｅ」という商用ソフトである[4]。WebOCM は学習管

理ソフトであり、コンテンツを用意しない限り導入できないため、まずは商用ソフトが導入され、九州大学でそのコンテンツを開発する構想もこの頃一部教員により練られ始めた。「ぎゅっとｅ」のもとで受講者は、リーディング、リスニング、グラマーの 3 コースに取り組んだが、英語 IIB は中級、英語 IIIB は上級のレベル設定とした。

しかし、この授業体制には次第に問題があることがわかってきた。第 1 に、教材のレベルが九州大学の学生には若干易しいという指摘があった。これは成績上位の履修者、授業担当教員等から聞こえてきたことである。このため、言語文化研究院英語科では、次のカリキュラム改定を目指して、教材を自己開発することを決め、リーディング、リスニング、グラマーの問題作成に入った。第 2 に、履修者の多くから、授業では主に個人で問題を解くウェブ上の作業が課されるというのに、なぜ固定した曜日時限に全員が同じ教室に集まらなければならないのかという疑問の声が常に上がった。既存の授業の枠組みにおける開講であったために、全員が同一の時間帯に同一の場所で作業するのは仕方のない授業方法であったのだが、確かに受講者からしてみれば、空き時間に出先や自宅で進めることができた方が都合がよかったことであろう。この声は、2013 年度から 2014 年度にかけて CALL 教室が廃止され、新入生に対して（求めがあれば）ノートパソコンを授業へ持参することが義務化されて以降はますます強まった[5]。自分用のノートパソコンがあるのなら、自宅でも作業が進められるわけであり、ノートパソコンの携帯性もあって、作業が時間的場所的束縛から解放されるべきだという意見は、至極もっともであった。

こうした背景から、2014 年度の英語新カリキュラム創設時に導入された CALL 科目の「学術英語 1・CALL-A」（1 年前期）と「学術英語 1・CALL-B」（1 年後期）では、授業時間の設定がなくなり、専任の CALL 担当教員 1 名（年間 10 コマに相当するので、「英語 IIB」「英語 IIIB」の計 27 コマよりもさらにマンパワーの節減につながっている）と TA（こちらものべ人数がかなり減少した）による運営に衣替えとなった（授業時間の設定がなく教室も浮くため、2014 年度からの新カリキュラムにおける基幹教育科目（教養課程的なもの）での柔軟な時間割編成にも貢献した）。しかし新教材は開発に長い年月を要し、準備が間に合わず、1 年遅れの 2015 年度からの導入ということになった。次節では新カリキュラムにおける体制について詳述し検討することにする。

3．2014 年度カリキュラム改定での授業時間のない CALL 科目の導入

2014 年度の新入生から、九州大学の英語 CALL 科目は、定められた曜日時限に受講者が集合することによる時間的拘束、大学の教室に集合することによる場所的拘束から解放される形で、履修者が自分に都合の良い時間に都合の良い場所で学習を行うこととなった[6]。全学部あわせて 1 学年に 50 のクラスがあるが、2 つのクラスを 1 つのブロックにまとめ、計 25 のブロックを設定して、ひとつのブロックについて 1 人の TA が付くこととなった。TA の役割は、担当するブロック内の履修者の学習履歴をチェックして、機械的な指導メールを個人個人の履修者に送ることである。例えば、中々学習を開始しない履修者に学習開始の督促のメッセージを送ったり、異様に短い時間で問題を消化している履修者に丁寧に問題を解くように指示するなど、英語能力の有無にかかわらず機械的にこなすことができる作業をしてもらう。そして、TA では処理できそうにな

い問題を発見したときは、CALL 科目専属教員に連絡を取る[7]。履修者は、こうした体制のもと、質問があるときは担当教員へ質問ができるが、教材システム（ぎゅっとｅ）内のメールを利用するか、もしくは担当教員の CALL 業務用メールアドレスへ送信することになる。担当教員は、TA や履修者から寄せられるメッセージに対応し、指導や成績算定のための学習履歴の分析を随時実施する。1 週間に 1 回は履修者全員へ一斉にメッセージの送信を行い、望ましい学習経過をたどっている履修者を半匿名で表彰し、学習への取組を促進する。

成績の算出方法は、定期試験が 50 点、英語力診断テストが 30 点、学習履歴等が 20 点の 100 点法によっている。定期試験は 35 点分が教材からの出題で、ペーパーベースで実施するが、リスニングはCDベースで行う[8]。授業時間帯の設定がないため、定期試験では各曜日の5限を利用し、他の科目の定期試験と重複する少数の履修者には、所定の手続きの上で、曜日を変更しての受検を認める[9]。残る 15 点分は、低年次生に必須の語彙表現集として指定している『九大英単』（研究社）からの出題である[10]。

英語力診断テストからは、入学時の 4 月と 2 年生の 4 月の 2 回分のスコアを成績の 30 点分に算入する。算定式は「2 回の英語力診断テストの平均スコア÷20（上限 30)」で、平均 500 であれば 25 ということになる。テストは現在 TOEFL-ITP を大学の費用負担で実施している[11]。受験しなければ「CALL-A」「CALL-B」ともに単位が認定されない（1 回目を受験しても 2 回目が未受験ならば同様である)。

学習履歴等 20 点の部分は、下記のような不具合があれば減点となり、あまりにひどい場合は 20 点を超えて減点することもあり得る。

・ありえない速度で問題を解いている（内容を見ずに選択肢をクリックするだけで進めている）
・締切間際にしか学習しない（1 学期の 15 週の通常学習期間が 3 回の学習期間に分かれ、それぞれに学習締切日の設定があり、与えられたノルマ問題数を達成することが求められている）
・どの問題も同じ選択肢ばかり選んでいる（内容を見ずに機械的にクリックしている）
・平均正解率が異常に低い（まともに学習していない）
・グラマーばかりを進めてリーディングは放置している

この他の減点要素としては、通常学習期間中 3 回の学習締切日までに指定された数の問題を消化しない場合があり、1 回につき 20 点の減点となる。これに対し加点要素もあり、通常学習期間の他に、「CALL-A」では夏休み、「CALL-B」では春休みに与えられた問題をこなした場合に、それぞれ 10 点が加点される。ある程度の挽回を可能としていることになるが、休業期間も含めたコンスタントな学習を促すという意味もある（この休業期間中の学習は任意であり、取り組まなかったことによって不利は生じない)。また、2 回目の英語力診断テストで 1 回目のスコアを 20 以上上回った場合、「CALL-A」「CALL-B」それぞれ 10 点加点となる。これは、与えられた問題を消化するだけではなく、その結果英語力が本当に向上することを目指すように受講者を促すことにつながる。

これらの科目には学習と定期試験の受験を免除する制度がある。旧カリキュラムにおいては、指定された試験（学内で実施されるものに限らない）のスコアにより学生が単位認定を願い出る方式であったが、新カリキュラムにおいては、1 年次の 4 月に実施される英語力診断テストのみ

を有効とし、そこで 520 に達している学生には「CALL-A」の合格の資格、570 に達している学生には「CALL-A」および「CALL-B」の合格の資格を与え、学習と定期試験の受験を免除する。但し第 2 回目の英語力診断テストが未受験の場合は両科目とも不合格とし（こうして全員受験によるデータ収集を確保する）、受験しても 30 点以上スコアが下落した場合は両科目の成績を 60 点とする（こうして英語力維持向上を促す）。そうした下落がない場合は「2 回分のスコアの平均 ÷6 （上限 100）」を成績とする。すると平均 600 あれば基幹教育時点での英語力は十分とすることを意味し、520 ぎりぎりでの免除の場合は「CALL-A」が 87 で B 評定になることを意味する。

1 学期の通常学習期間に 3 回ある学習締切日でのノルマ未達による減点（1 回につき 20 点）だが、旧カリキュラムではノルマ未達は即時不合格を意味した。新カリキュラムでは授業時間に集まって強制的に学習が行われることがなくなったことと考え合わせると、学習締切日間際になってあわてて駆け込み学習に走る履修者が増えるのではないかと予測したが、2014 年度前期を見る限り実態はむしろ逆であった（詳細は鈴木（2015 予定）を参照）。

こうした成績算定方法を含めた運用は、2015 年度に教材が「ぎゅっとｅ」から新教材へ移行しても微調整のみで適用される予定である。

4．新教材と LMS の概要

2015 年度からは九州大学で自己開発した教材を、国立七大学外国語教育連絡協議会附属国立七大学外国語 CU 委員会の枠組みで開発してきている学習管理システム（LMS: Learning Management System）の WebOCMnext に搭載して使用する予定である [12]。

4.1 教材の概要

教材の開発は 2008 年頃から始まった。「ぎゅっとｅ」には比較的平易な問題が多く、九大生の中には歯ごたえが不足すると感じる履修者がおり、九大生に適合した教材は自作するしかないという判断であった。内容に関しても、学術英語という九州大学における英語教育の目標に即して、教員側が伝えたいと思う内容を扱った教材とすべきであるという考え方に基づいて、自己開発が決行された。「目的に適合する教材ならば必ずしも自己開発によるものでなくてもよく、既存のものをしっかり探す方法もある」という議論もあり、確かにそのとおりであると感じられたのではあるが、国立七大学外国語 CU 委員会の枠組みによる科学研究費の研究グループでは、全国の大学で共有できる教材を WebOCMnext に与えるという計画を持っており、今回開発した教材は共有化のためにオリジナルのものである必要があった [13]。

4.1.1 リーディング

教材開発は、リーディング、リスニング、グラマーに分かれて行われた。リーディングに関しては、主にネイティブの同僚が集めた著作権に問題のない英文をもとに、言語文化研究院英語科教員からなるリーディング問題作成班（筆者は含まれていない）が、5 問の四択の設問を付したセットを 50 作成した。難易度を 3 段階に分け、20 セットのレベル 1、20 セットのレベル 2、10 セットのレベル 3 とした。その題材は以下のとおりである。

レベル 1：リトル・リーグ、アンデルセン、文化と身体的接触、子供の態度、モンテレー市、米国学校スポーツ、野口健、ヴァイキング、東京ローズ 1、東京ローズ 2、ローマ軍、ピラミッド、宇宙飛行士、賢者の助言、温泉、さらわれた息子、犬と猫、オランダの大航海 1、オランダの大航海 2、日野原重明

レベル 2：監視カメラ、水不足、エイズ、年金と老人雇用、ネット上のコミュニケーション、オンライン・コミュニケーションの問題、東アジア人と協調、イヌイットの村で、日本人と自然、英国小学校教員の性別、冷凍精子、臓器移植、野生動物に近づける距離、日本における女性の政治進出、日本の戦後経済と環境、人差し、語彙力と読解力、子供の質問、カラスの話 1、カラスの話 2

レベル 3：J. K. ローリングとチャリティ、ルネッサンス、アフリカ系アメリカ人の北部への移動、円安、米国の自然公園、振子と時計の正確さ、人類の自然利用、剽窃、人ゲノムとその影響 1、人ゲノムとその影響 2

これらの問題のうち、前期の「CALL-A」ではレベル 1 の問題を中心にレベル 2 とレベル 3 を少し混ぜ、後期の「CALL-B」ではレベル 2 とレベル 3 を中心にレベル 1 を少数混ぜる。学術英語が目的の教材ではあるが、報道や随筆のスタイルなども含まれている。設問は主に内容理解に関するものである。「ぎゅっとｅ」の時代は、多くの受講者にリーディングを後回しにする傾向が見られた。それはリスニングやグラマーに比べて 1 題にかかる時間が長いからであると思われる。そのため、リーディングの素材はあまり長いものにならないように配慮し、設問も 5 つに絞った。

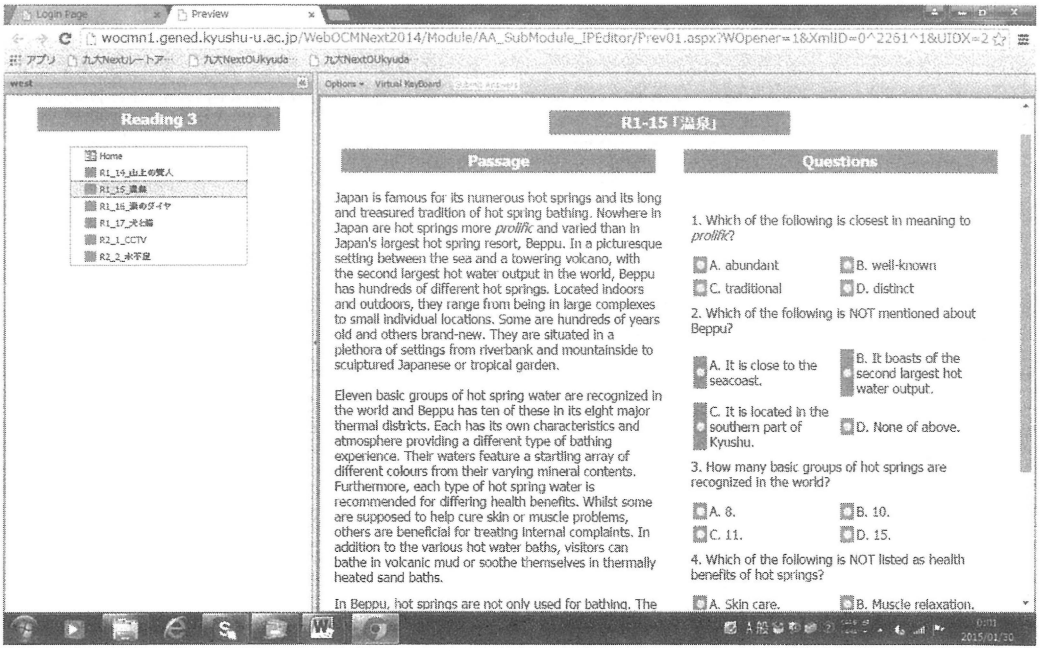

図１　リーディング教材の問題画面

4. 1. 2 リスニング

リスニングに関しては、取組みが遅れ、ここ2年ほどで急ピッチの作業が行われた。まず本稿筆者の鈴木と岡本がリスニング問題作成班を構成し、問題の種類やテーマを検討して、最終的に次の3種類の問題を準備する計画を定めた。

◆TOEFL-ITP型： TOEFL-ITPの問題に適切な内容の英文について四択（以下四択と表記している場合でも実際には一部三択）の設問を1~5題付す。スクリプトと設問はすべてネイティブ・スピーカーの同僚5名のオリジナル。録音にはさらに同僚等の協力を仰いだ。校正に別のネイティブ・スピーカー教員があたった。

・Aタイプ：「短い日常対話＋四択設問1つ」を10セット
道案内、扉で譲り合い、肩が触れて謝る、落し物拾い上げに御礼、会議を中座、軽いやりとり、面接の終わり、問い返し、昼食の誘い、お釣りの間違い

・Bタイプ：「長い日常対話＋四択設問3つ」を10セット
診察、電話、ホテルのチェックイン、鉄道切符の購入、レストランでの支払い、ショッピング、外貨両替、税関、授業欠席の予告、郵便局で

・Cタイプ：「アナウンス＋四択設問5つ」を10セット
空港アナウンス、駅アナウンス、ラジオCM、TV番組案内、映画予告、留守録、自動応答メッセージ、ツアー内容案内、天気予報、博物館ガイド

・Dタイプ：「短い深刻な対話＋四択設問1つ」を5セット
工場の海外進出と経済、英語学習、就職活動、大学院生増加、課外活動

・Eタイプ：「長い深刻な対話＋四択設問3つ」を5セット
進路、治療方針、人生相談、核兵器の是否、地球温暖化

・Fタイプ：「フォーマル・スピーチ＋四択設問5つ」を5セット
披露宴、弔辞、打合せ、受賞挨拶、施策提案

・Gタイプ：「短期留学での短い対話＋四択設問1つ」を10セット
現地到着、教科書購入、学会情報、電話番号変更、電球切れ、解りやすい授業、留学より他のこと、留学先、授業中に質問、教員と議論

・Hタイプ：「短期留学での長い対話＋四択設問3つ」を10セット
入国審査、新ルームメイト、課題確認、内密の相談、書籍検索、引用、学会発表相談、ティーチング・アシスタント、授業欠席後始末、学会で授業欠席

・Iタイプ：「短期留学での長い談話＋四択設問5つ」を10セット
プログラム説明、図書検索、寮説明、奨学金説明、作文コンテスト、授業説明、発音講義、授業概要、情報学講義、天文学講義

・Jタイプ：「学会発表での質疑応答＋四択設問1つ」を4セット
マリファナ、古いデータ、支持不足、引用問題

・Kタイプ：「議論の長い対話＋四択設問3つ」を6セット
総理の政策、採取生物分析、若者心理、癌治療、いじめ、日本の経済

・Lタイプ：「学術講義＋四択設問５つ」を５セット
宮崎アニメ、シルクロード、ジェネリック薬品、プラトン、DNA

◆Elllo サイトから：　「1~2 分の対話に選択設問数個」を 30 セット。非母語話者をふんだんに含む。既存の非営利英語学習サイトから許諾を得て転載[14]。話題は様々。

米国人＋ルーマニア人（馬）、米国人＋日本人（タイ旅行）、米国人＋ノルウェー人（英語学習）、米国人＋ニュージーランド人（スポーツ）、米国人＋カナダ人（世界のバー）、米国人＋ニュージーランド人（ホストファミリー）、米国人＋スウェーデン人（スウェーデンの冬）、米国人＋ヴェトナム人（在日留学生のレク）、米国人＋インドネシア人（インドネシア料理）、米国人＋イタリア人（イタリア料理）、米国人＋英国人（授業でパソコン）、カナダ人＋中国人（中国での英語）、リトアニア人＋ベルギー人（両国の夏）、米国人＋エストニア人（エストニアでの女性）、米国人＋フランス人（家事手伝い）、英国人（新聞）、カナダ人＋インド人（ここ数年）、オーストラリア人＋ケニア人（ケニアの自然）、メキシコ人＋バングラデシュ人（離婚）、米国人＋スリランカ人（スリランカでの女性）、米国人＋スイス人（スイスの言語状況）、ヴェトナム人＋イラン人（家の内外での挨拶）、中国人＋韓国人（韓国での婚姻の慣習）、メキシコ人＋コロンビア人（ガラパゴス）、チリ人＋アルゼンチン人（サッカー）、米国人＋カナダ人（カナダの生活）、米国人＋米国人（情報収集）、スペイン人（生活の日西比較）、米国人＋パプア・ニューギニア人（地球温暖化）、南アフリカ人＋チェコ人（試験）

◆VOA から：　「3~5 分のゆっくりの談話に四択設問５つ」を 10 セット。設問は九州大学側のオリジナル。

宇宙の神秘 1、宇宙の神秘 2、宇宙の神秘 3、色にまつわる表現、渋滞対策、メイデー、プレート・テクトニクス、津波の脅威 1、津波の脅威 2、大震災対応

従来の「ぎゅっとｅ」では、数秒から 10 秒程度の音源に基づく問題が多かった。これは「ぎゅっとｅ」が恐らく TOEIC を意識して開発されていることに起因すると考えられる。しかし学術英語を標榜する以上、もう少し息の長い音源を使用する必要があり、内容も、講義のようなもの、学会でのやりとり、留学先で出会う場面などを含める必要があると考えた。また、九州大学からの交換留学への応募にあたって TOEFL のスコアが要求されるため、問題の形式は TOEFL に似たものとしている。

本来であれば、自己開発の教材だけでリスニングの問題群を構成してもよかったのだが、実際には個人運営のサイト「Elllo」から許諾を得て音源を借りた問題もあり、著作権の問題が生じない VOA から導入した問題も含まれている。「Elllo」は偶然発見したサイトだが、日本に来ている多くの留学生の対話が含まれているサイトで、話者の多くは英語圏以外の非母語話者の方々なので、非母語話者がコミュニケーション言語として英語を使うことが多くなった世界の状況の中で、内容は必ずしも堅い学術ではないが、これらの音源を含めることは重要だと判断して採用した。このサイトには、1 分から 5 分程度と、様々な長さの音源が用意されているが、せいぜい 1 分強

程度までの短めのものを選定した。VOA はしばしば市販教材にも採用される音源だが、よいコンテンツと比較的長めの音源に特徴があり、しかもゆっくりとしたスピードの音源が用意されているので、少数採用した。速度を落とすよりもヒントを与えるなどのいわゆるはしごかけをする方が近道かもしれないが、様々に能力差のある 1 年生全員が使う教材であり、どの教材も同じような速度であると強烈な負担感を持つ学生もいると思われるため、あえて遅い速度のものを含めることとした。

前期の「CALL-A」では、TOEFL-ITP 型の A タイプから F タイプ、Elllo サイトから比較的平易な半分、VOA から半分が出題される。後期の「CALL-B」では、TOEFL-ITP 型の G タイプから L タイプまで、Elllo サイトから比較的難易度の高い半分、VOA サイトから半分が出題される。

3 つのタイプの問題のうち、TOEFL タイプの問題はオリジナルの音源を要するため、録音が必要であった。リスニングは開発が著しく遅れていたこともあり、きちんとしたスタジオでの録音ではなく、研究室で IC レコーダを使っての簡易な体制を採った。録音の際のスピーカーには、作問したネイティブの教員以外にも、他のネイティブ・スピーカーの教員や教員の御家族にまで協力を仰いだ。また、録音レベルの均等化の加工では、ICT に明るい同僚の協力を仰いだ。

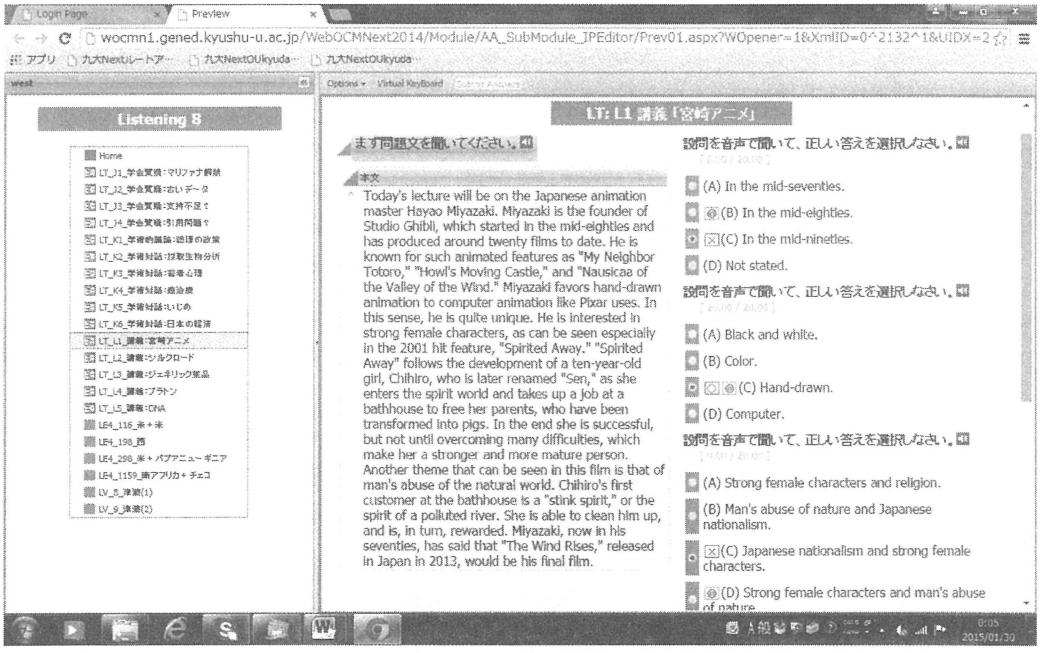

図 2　リスニングのスクリプトと正解の表示画面
（◎は正解、○×はユーザの選択を表す）

4. 1. 3 グラマー

グラマーと呼んではいるが、実際には「文法」、「語法」、「その他」の 3 つの部分に分かれ、それぞれがさらに初級、中級、上級に分けられているため、全部で 9 つのカテゴリーで構成されて

いる。「その他」の中には、英語に関係した雑学的なものがいろいろと盛り込まれており、手紙の作法、論法、ことわざ、ジェスチャー、英国史（米国史が 2015 年 4 月から加わる予定）、政治的妥当性、テレビ局、英字新聞の見出し、句読法、論文の構成、など多岐にわたる。初級は高校までの確認を行うようなレベルの問題であり、中級が最も大切な部分と言える。上級は「ぎゅっとｅ」よりも高いレベルを目指した。

前期の「CALL-A」には、「文法」「語法」「その他」のいずれでも初級および中級の前半が配分され、後期の「CALL-B」には、「文法」「語法」「その他」のいずれでも中級の後半と上級が割り当てられている。上級にはかなりレベルの高い問題が多数含まれているが、「文法」「語法」では春休みのオプション学習の範囲（学習しない場合加点にはならないが減点にもならない）に入っており、「その他」でも半分はその範囲に配分されている。

これらの問題の開発は、3 つのコース（「リーディング」「リスニング」「グラマー」）の中で最も早くから取り組まれてきたが、言語文化研究院英語科の中で作成にあたる文法問題作成班（筆者の一人鈴木も委員のひとり）が発足し、英語科の教員に数度にわたり問題の募集をかけ、採否を詳細に検討し、解説を付し、9 つのカテゴリー（「文法」「語法」「その他」×初級・中級・上級）に分けた。

問題の内容は以下のようになっている。

文法初級：四択問題 65 セット

数の一致、仮定法過去、自動詞＋再帰代名詞（drink oneself to death）、接続詞 that、形容詞最上級（the biggest）、形容詞最上級（the most common）、not と to 不定詞の語順、否定＋either、法助動詞＋完了形不定詞（might have given）、比較級の強調（far bigger）、mind + ～ing、最上級（one of the most famous sites）、each other、There を代名詞とする誤り（*there has many sites）、感嘆文（what a big city = how big a city）、疑問詞疑問文（*at what were you looking）、tough 構文（Fukuoka is nice to live in）、kind of you、仮主語構文（it is ～ whether）、on + ～ing、interested/interesting、強調構文（it was not until ～ that）、冠詞（catch by the hand）、冠詞（1 meter a second）、冠詞（the rich）、冠詞（特定物に the）、冠詞（among the 1st to go）、冠詞（had a bad cold）、冠詞（the Japanese）、冠詞（the 比較級 + the 比較級）、have a hard time ～ing、want the engine repaired、glad to hear、need repairing、冠詞（a pianist and dancer）、nobody but me、no matter + 疑問節、否定に同調する no、catch John stealing ～、「～していたら…」の and、a greater risk than、現在完了+期間の表現、使役（許可）の let、使役の have、and の両側は同一形式、動詞が be の分詞構文、the second largest city、as much money as、非制限関係節、副詞の位置、命令文の付加疑問、let's ～ の付加疑問、let him (*to) go、in + 月、*junior than、付帯状況の with、否定に同調する no、現在分詞と過去分詞、to hear him talk（聞いたら）、the 比較級 + the 比較級、not the only ～、使役 make の受動態、過去分詞の分詞構文、than was expected、時を表す副詞節の時制

文法中級：四択問題 202 セット

so ～ that ...、when ～ing、数の一致、数の一致 (data)、数の一致 (either ～ or ...)、分詞構文の意味上の主語、no later than、whoever、how come、I'd rather you didn't、me either、possibility of Acc-ing、選択疑問文、a fifty-dollar bill、how soon、indeed、insist on Acc-ing、単純過去 + when、過去進行形 + when、was used to being、never has the city been、scarcely any、if it weren't for、the reason is that ～、文の逆接、完了形と recently、one out of ～ is、both of which、have one's car checked、twice as much as、1.5 grams of ～ is、26-story、by an average of 10%、three-fifths、so smart a dog、neither of whom、間接疑問文、so beautiful a piece of art、had we known that ～、had I been brought up、not only was he driving、hardly ～ when ...、only by ～ will you be a ...、out of the house stepped John、demand + 仮定法現在、suggest to ... + 仮定法現在、what did he tell you he would buy、did he tell you what he would buy、when and where、* with what did you have to make do、this song is easy to play on the piano、this book is too difficult for you to read、this knife is easy to cut meat with、be of no consequences、high time＋仮定法過去、have bad works spoken to me、there 文で be 以外の動詞、* "..." shouted he、完了形 + in the past、half of them are、Tom, as I know him, is、have your shoes repaired、it is + 判断の形容詞＋仮定法現在、*drive the car careful、perhaps you would be kind enough、論理関係の推定、旧情報を文頭に、that is why ～、try restarting it、*the train was caught by Joan、the lake is (*the) deepest here、the elephants は総称にならない、the tiger は総称になる、the cheaper、I would appreciate it if、過去分詞の分詞構文、given + 名詞（句)、was able to、when we arrived, he made some coffee（時間のずれ)、進行形と単純過去、only because ～ did Nancy married him、分詞構文意味上の主語と主節主語、the staff who he thinks respects him、than he does English、事態描写と状態描写、非制限関係節、somebody が主語の命令文、形容詞の順、as little beer as、she is being rude、given + 名詞（句)、no less than、as early as the 1950s、no more ～ than、had been working ～ when、総称、冠詞、are many times more likely to be、there's never been a better time to ～、while pregnant、心的状態は進行形不可、正しい受動態、must / have to、独立関係節、経路の副詞句生起順、独立関係節、動詞＋of 奪われる物、as is often the case with、women athletes、actually の位置、未来進行形、as soon as + 現在形、as great an actress as ever lived、no less ～ than ...、能動受動態 cut、what の数、受動態 order was given、数、little or no time、kind of you、過去完了、until / by、get / have/ let / make、little, if any、副詞の種類と位置、many more stamps、*say Alice to be、such a fool but he knows ～、形容詞の語順、*very + 進行形、様態副詞の位置、too / either / also / neither、*call up him、*call him on、*long + ～ing、be wasteful of、be aware of、疑問詞、as の用法、this の用法、be opposed to、nor + 倒置、what ～ for、no more than、no less than、be

more shy than unsocial、no more ～ than、no less ～ than、場所と時の副詞類の生起順、間接疑問文、省略、in order not to、現在分詞、関係節、women athletes、接続詞 for、からと言って、as was one's custom、an English teacher of Japanese、be drunk、iceberg、分詞構文、while + ～ing、２以上、thanks to、instead、only 句と倒置、what do you like about ～、only / instead of、付帯状況の with、take A for B、appreciate、*be watched to do、形容詞が先行詞の which、主語内要素の文末外置、despite、文を先行詞とする関係形容詞、as I could tell、as is usual with、Don't anybody move!、*a one、three times / *by far as large as、量化詞 all の位置、現在分詞、ought I to do、ought to の付加疑問、no rule but has ～、whose、that、疑似分裂文、couldn't be better、～とはどうかしたのですか、than is needed、what happened to ～、insist / demand / require / tell、this devil of a lawyer、may / might / can / could、*wipe the table dirty、付帯状況、look at、付帯状況、still

文法上級：四択問題 55 セット

良しとされない、otherwise、have ～ to do with、couldn't ～ better、with that shirt on、come / go、否定での倒置、gapping、否定を含む gapping、熟語の一部を受身の主語に、make much of の受身、欲しがる人の分だけ、仮定法現在、then が受けられない節、形容詞類の語順、二重属格、run-on sentences、run-on sentences、seemingly、文の接続、比較、otherwise、間接選択疑問、So I am、day と date、do so / do it、*Mary's knowing of the murderer's face、文副詞、文副詞、*on whom I can count、the members of which、文頭文末の場所句、a picture of his / himself、make / have / let / get、make / have / let / get、seldom / hardly / rarely、ever、文頭の副詞と否定、文末の副詞と否定、if、*I have many documents to be rewritten、SVOO の受身、get 受動文、much as、時間句と場所句の語順、*as Shakespeare wrote、one、関係詞 that、be 動詞の分詞構文、be supposed to、turn out、付加疑問、than + 倒置、one、gapping

語法初級：四択問題 56 セット

between you and I、despite、数の一致（the number of jobs is）、a lot of advice、is covered with、start ～ing、discuss（目的語前に前置詞不要）、approach（目的語前に前置詞不要）、by（までに）、to the best of my knowledge、enter（目的語前に前置詞不要）、wait to meet him、now that ～、suggest + 仮定法現在、Ph.D in ～ / work on ～、冠詞（a second opinion）、冠詞（the Mississippi）、冠詞（無冠詞 + weather）、冠詞（無冠詞 + Kyoto's Ryoanji Temple）、不可算（a lot of homework）、不可算（information）、語形（respectful / respective / respective）、語形（late, later, latter, latest）、be reminded of、live in、according to、a chance of ～ing、not only / but also、tell ～ about ...、payable、instead of、bring about、come across、at large、*many population、get married to、bring to an end、two pairs of sunglasses、give in、take after、take over、the key to、on August 1st、do away with、many a man、raise a large family、more than five books、senior to、know better than、how dare you say

such a thing?、satisfy one's curiosity、require、have something to do with、area / volume、play

語法中級：四択問題 185 セット

for here or to go、give you a lift、take turns ～ing、may I remind you that ～、make it in this heavy traffic、across the street、compared with、homework、would be grateful、there is little doubt that ～、a number of chocolates、otherwise、within walking distance of、*an important advice、*another days、go in for、sentence、help、precede / follow、to / in / on the west of、to / in / on the west of、vouch for、chances are that ～、depend upon it that ～、another question、make the party successful、tooth and nail、pass as / for、fall vacant、see to it that ～、determine to、*she was damaged、far from being honest、go to college、study by the hour、have a runny nose / one's nose is running、spare、do harm to、know better than、run for、sit well with、go into effect、*tall mountains、the same as、say、*according to his opinion / view、owe him 100 yen、a typhoon *attacked / struck Fukuoka、on behalf of、with ～ in mind、a pain in the neck、get stuck in traffic、definitely、*Because, ～、childproof、smoke-free、stand in one's way、doubt / suspect、over objections of、fall victim to、accuse him of ～ing / blame him for ～ing、*the most extraordinary、owe one's success to、contribute to the delay、in no cases whatever、before I knew it、The whole room enjoyed the party、a fit of anger、place an order / bear resemblance to / bring the book to completion、*persuade him to be intelligent、a cake of soap / a lump of sugar / a flock of sheep、*more simple、unhappier、*World War the Second、strike a balance、on the basis of、on an individual basis、go back to the basics、have no bearing on、come into being、come out with、do away with、get ～ across to、give ～ away to、go through with、keep back、lay aside、let down、anything but / nothing but、bring ～ to bear on、as of、the rumor has it that ～、know a person by the company (s)he keeps、if anything、pay well、*very enormous、go *awake / aboard、she is a beauty / *kindness、price – low / item – cheap、last、on the contrary、send someone over、that's OK、each、start without you、as far as I am concerned、concerned、buy you lunch、put oneself into someone's shoes、*this pen doesn't write、much less、break with、bring something home to someone、come to、come to terms with、get one's idea across to、get nowhere with、in the know、on the initiative of、throw a wet blanket on、boil down to、all other things being equal、as of、give someone to understand、otherwise、at large、have an edge over、make up to、come as no surprise to、point to、not all、to make matters worse、on average、very few people、reduce effectiveness、over a period of、descend from、have an effect on、bring something under control、susceptible to、vary、processed meat、for example、take something for granted、

*sentencing e-mail、provided that、whereby、justify、drive someone crazy、question / ask、stay away from、in return、no patience with、take leave of、to the best of my knowledge / for all、dispensable、evidence to the contrary、at odds with、on the verge of、on a trial basis、threaten to do、yet to do、despite、given、as to、figure out、account for、similar to、exaggerate、entitle someone to do、comply with、have a strong stomach、extend / shrink、night shifts、old habits die hard、function、feel embarrassed about、turn over a new leaf、different than / to / from、pay、*go and come、mine、start for、excel at / in

語法上級：四択問題 38 セット

it so happened that、in case、replace A for B、give me something、come all around to do、appropriate、where the action is、know A from B、much ado about nothing、play the devil's advocate、the apple of discord、pay an arm and a leg、in the arms of Morpheus、raise doubt about、dance attendance on、get the ax, get one's back up、back and fill、the be-all and end-all、no bed of roses、belong、appear before the bench、allow someone the benefit of the doubt、be bent on、be better off ～ing、decide against ～ing、get away with、give someone a rain check、the greatest / best thing since sliced bread、but me no buts、save for、be exempt from、imports / exports、contain、China / Chinese、lapse from virtue、wouldn't be seen dead、pay

その他初級：四択問題 14 セット

つなぎ表現の選択（for example）、代用表現は先行詞より後に、English⇒the language、依頼表現の丁寧さの度合い、諺（practice makes perfect）、礼状の構成要素の順、つなぎ表現の挿入位置、引用符による引用、丁寧さアップ（nice seeing you⇒it was a pleasure seeing you）、三段論法、ニュースソースの推測、諺（blood is thicker than water）、プレゼンで必要なこと、台風に女性名、to whom it may concern、日付、段落の話題文、論文構成要素の順、学術作文でのスタイル、「表」を主語としたときの動詞、多義文

その他中級：四択問題 104 セット（2015 年 4 月に米国史が加わる）

to whom it may concern、手紙の日付表記、topic sentence、論文の構成順、学術英作文と口語表現、the table shows / *attempts / *interprets / *evaluates、多義文、性別への偏見を表す表現、性別への偏見を表す表現、実証的事実報告と感情的表現、in fact の論理、単語レベルの米語／英語、sleep on it、as a matter of fact の論理、手紙の構成順、手紙のブロック式、フォーマルな手紙の日付表記、フォーマルな手紙の住所表記、dear sir or madam、手紙の結び、フォーマルな手紙の差出人自署位置、be pleased to、deepest condolences on、extend our cordial invitation to、return someone's hospitality、wondering whether it might be possible to、would be extremely grateful

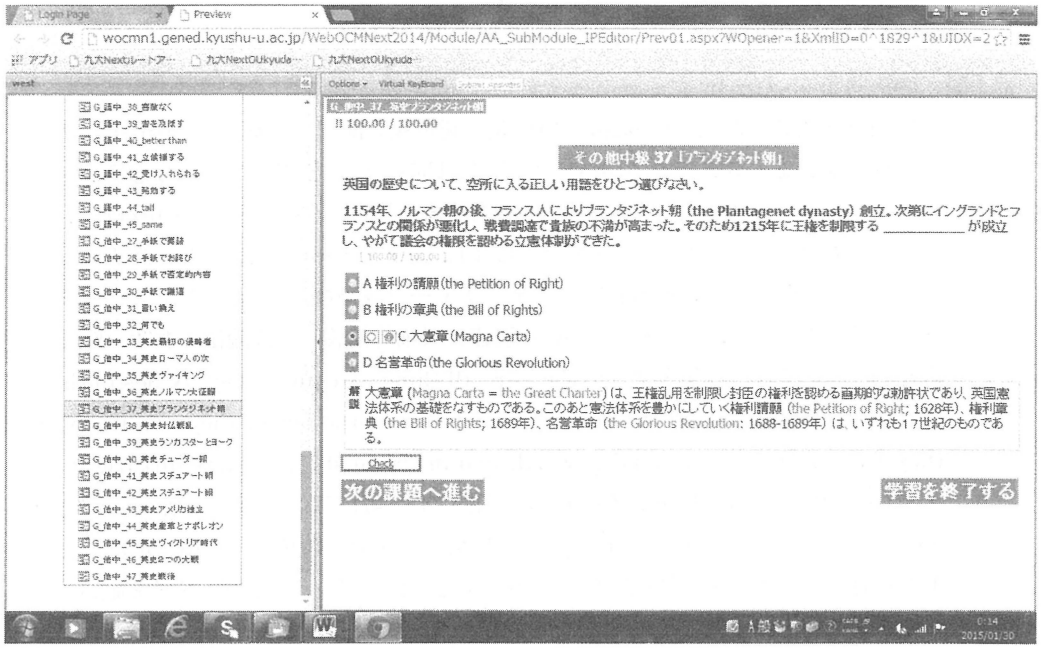

図３　グラマーの正解と解説の画面

if you could、sorry to take up your time when you are busy with、regret to have to inform you that、hope this will go some way toward ～ing、同格名詞、whatever、英国史：ケルト人、英国史：ゲルマン人、英国史：ヴァイキング、英国史：ノルマン大征服、英国史：マグナ・カルタ、英国史：百年戦争、英国史：ばら戦争、英国史：エリザベス１世、英国史：清教徒革命、英国史：名誉革命、英国史：ボストン茶会事件、英国史：トラファルガーの海戦、英国史：東インド会社、英国史：チャーチル、英国史：サッチャー、コンマ誤用、偏見と表現、パラグラフ・ライティングの topic sentence、一貫性・結束性・独創性・統一性、topic sentence とは？、パラグラフの構成、エッセイの thesis statement、弱く読む語、although + yet、what is it / what is that のイントネーション、thus の論理、引用と句読法、疑問文を引用した疑問文と句読法、接続副詞と句読法、am I right in thinking that、could you elaborate on、I find it difficult to be enthusiastic about、actions speak louder than words、on behalf of my company、birds of a feather flock together、an early bird catches the worm、kill two birds with one stone、the Big Apple、和差積商余り、有理数・分数、5 の 2 乗、各種四角形、三段論法、前提、ワープロでの改行、新聞の見出しの文法、コロンとセミコロン、dress code、人種的偏見、footnote と endnote、FYI / ASAP / BTW / WRT / RSVP / FAQ、参考文献、性差別、文脈から正しい比較級、句読法、建築様式、論文の構成順、ブレインストーミングの方法、political correctness、glass ceiling、米国民主党、affirmative action、ITV（英国放送局）、BBC（英国放送局）、CNN（米国放

送局)、MTV（米国放送局)、米国三大ネットワーク、Reuters、Wikipedia、引用符、please find attached、excellent / lovely / cheers

その他上級：四択問題 55 セット

旧情報・新情報の配列（受動態)、旧情報・新情報の配列（繋辞文)、旧情報・新情報の配列（受動態・繋辞文)、引用文と伝達部、即答を控える表現、適切な応答、ジェスチャー（こっちへ来い)、ジェスチャー（まあまあ)、ジェスチャー（引用符)、ジェスチャー（お金)、ジェスチャー（くそくらえ)、ジェスチャー（私)、ジェスチャー（悪い)、ジェスチャー（幸運を祈る)、ジェスチャー（我慢ならない)、ジェスチャー（ちょっと待った)、ジェスチャー（OK)、別盛、帰納的推論、三段論法、剽窃、倒置と情報配列、色の意味、和製英語、to the pure all things are pure、beauty lies in the eye of the beholder、a thing of beauty is a joy forever、the bigger they are, the harder they fall、a bird in the hand is worth two in the bush、sell one's birthright for a mess of pottage、once bitten, twice shy、国鳥、割り切れる、べき乗、三乗、exa-, femto-, nano-, peta-、atto-, deci-, hecto-, pico-、体積、三角形、四角形、面積、定数、ニュートンの運動の法則、熱力学の法則、メンデルの法則、ケプラーの法則、参考文献、URL、州立大学の URL、ゲルマン、two blacks do not make a white、a new broom sweeps clean、メタファーとメトニミー、五感と比喩、Roe v. Wade decision

4.2 LMS の概要

新教材を搭載して使用する学習管理システムの WebOCMnext は、大阪大学サイバーメディアセンターの細谷行輝教授が中心となって、国立七大学外国語 CU 委員会の枠組みのもとに研究開発されてきたものである。そのきっかけは、当時のプラットフォームが外国語教育にとっては使いにくいということで、細谷教授（もともとドイツ語の教員）が、外国語教育に特化し、無償で利用でき、文系の教員でも容易に使用できるようなシステムの開発を志したことであった。幾度もの科学研究費の取得により開発が進み、無償で利用することができるようになり、マルチメディア教材やテストの作成が簡単にできるような機能や、学習管理や学習履歴の分析などの機能が次々に導入・改良された。2 度のフルモデルチェンジを経て、最新モデルである WebOCMnext の初期バージョンが 2014 年 3 月に九州大学のサーバにインストールされ、その後数度のバージョンアップの反映と教材の搭載が行われた [15]。そして 2014 年 12 月 24 日から、授業での一部先行試用が始まり、2015 年度の授業からの本格利用に備える運びとなったが、教師メニューの中の学習履歴の分析の機能のインストールが本稿執筆に間に合わず、その部分に関してはほとんど言及できないことをお断りしておく。「ぎゅっとｅ」で閲覧できていた程度の各種学習履歴（過去の任意の時点までにおけるユーザ毎およびクラス全体の学習時間、消化問題数、正解率など）は閲覧できるようになる予定である。

この学習管理システムは、本来教師が対面で行う授業に組み込まれてマルチメディアによる補助学習ができるように意図されており、解説や演習の授業に使われる教材部分に、練習問題や試験の機能が組み込まれている。九州大学では完全自律学習用のドリル教材を練習問題として搭載

しての使用となっていて、それに合わせて練習問題の機能の強化や学習管理のメニューのカスタマイズがはかられ、2015 年度前期の授業に間に合うように実装されることになっている。また教員による練習問題の作成は、XML 言語を特別な知識がなくても扱うことのできる IP エディターにより、容易に行うことができる。音声ファイルや動画の貼り付けも難しくなく、問題のフレームと、ユーザが正解を選択した後に提示する正解や解説を示したフレームの組合せがひとつの画面で作成できる。

この他、教材内掲示板機能、出欠管理機能（九州大学では意味をなさない）、マルチメディア辞書機能、ファイル管理機能、自己弱点克服機能等を備えており、多様な利用形態が可能なシステムとなっている。

サーバは学内競争資金を得て学内のサーバ室に設置されており、九州大学基幹教育院の助教と技術職員によって管理されている。学習管理システムのインストールと更新その他のメンテナンスは大阪大学サイバーメディアセンターからリモートで行われる。履修者のユーザ認証は、大学で発行される ID とパスワードに基づいてシボレス認証で行われる。動作環境としては OS が Windows 7/8/8.1 または MacOS 10.6～9 で、ブラウザが Windows では InternetExplorer8 以降もしくは GoogleChrome、MacOS では Google Chrome であるが、九州大学では GoogleChrome を使用するように指導している。

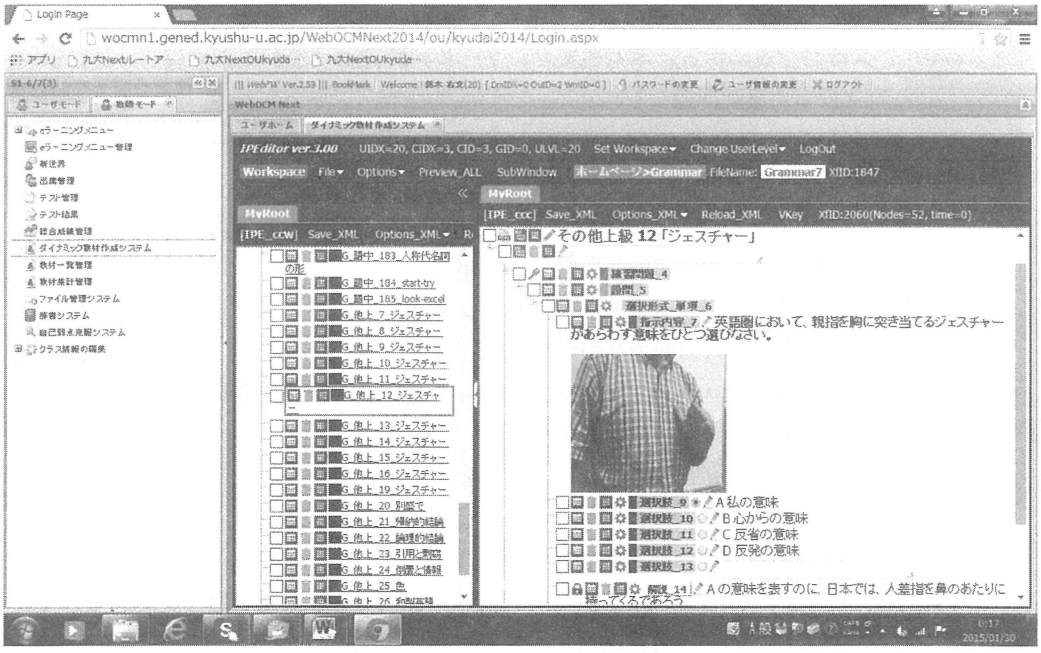

図４　XML エディタによる教材作成画面

5．今後の展望

本稿で取り上げた科目は、他になかなか見られない様々な特徴を持っている。授業時間帯の設定がないこと、学生の完全自律学習によるものであること、事実上ひとりの専属教員とのべ 25 名程度の TA だけで運用していること、ほとんど学内で自己開発した教材を使用していること、夏期休業中や春期休業中にも学習を促していること、外国語教育用に大学間協同の枠組みで開発された無償の学習管理システムを使用していることなど、枚挙に暇がない。そしてその本格運用は 2015 年 4 月に始まるところであり、今後コンテンツの入れ替えなど様々の問題が発生したり、分析研究に値する諸々の側面が見えてくることが考えられるので、ぜひ怠りなく観察を続けていきたいと考えている。

注

1・・・筆者のうち鈴木右文（九州大学大学院言語文化研究院准教授）がこの基盤研究（A）の研究分担者であり、岡本太助（九州大学大学院言語文化研究院准教授）はそれに基づく九州大学内での教材開発への協力者である。研究代表者は大阪大学サイバーメディアセンターのマルチメディア言語教育研究部門の細谷行輝教授である。

2・・・正確な年代について、杉浦謙介東北大学教授の助力を仰いだ。記して謝意を表したい。

3・・・関係の科学研究費等は以下のとおりである。

2001【 文部科学省メディア教育開発センター共同研究 B「デジタル情報テクノロジーの教育応用研究開発」】

「国立大学サイバー・ユニバーシティ構想の実現に向けた枠組み作り」

2002-2003【科学研究費補助金基盤研究（B)(2)】

「国立大学サイバー・ユニバーシティー用プラットフォーム開発研究」

2004-2005【科学研究費補助金基盤研究（A)(1)】

「国立大学外国語サイバー・ユニバーシティ用コンテンツ開発」

2006-2008【科学研究費補助金基盤研究（A)】

「外国語サイバー・ユニバーシティ用マルチメディア辞書開発研究」

2011-2014【科学研究費補助金基盤研究（A)】

「外国語サイバー・ユニバーシティ用自動弱点型 e ラーニングの総合的研究」

2013-2015【科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金基盤研究（A)】

「デジタル化による外国語教育の質的改革」

4・・・広島市立大学の複数の教員によって作問され、北辰映電（株）が商用として配信している。全国で数十の大学が授業補助用もしくは自習用に採用している。

5・・・このノートパソコン必携の方針は、九州大学情報統轄本部の主導により、大学執行部の了承を得て進められた。パソコンの性能や導入するソフト等については、各学部等毎に若干要求内容が異なるが、九州大学の授業で修業年限の間使用することを前提にして定められた。このノートパソコン必携化のかわりに、九州大学の多くの教室をカバーする

強力な教育用無線 LAN が 2 年がかりで導入された。このため、大学がコンピュータ端末を用意した教室を維持する必要がなくなり、CALL 教室が廃止となったわけである。情報教育用のコンピュータ教室も同様に廃止となり、少なくとも多くの英語の授業が行われる伊都キャンパスのセンターゾーンでは、ほとんどの教室で受講者が持参したノートパソコンを利用する形で授業が展開できることとなった。いわばほとんどの教室がコンピュータ教室になったようなものである。当時これらは思い切った施策であるとして全国的に注目された。

6・・・2 年生は前期に旧カリキュラムの「英語 IIIB」を無線 LAN 装備で大人数収容の普通教室において履修したが、持参したノートパソコンによって教室で作業することが求められる最初で最後のケースとなった。

7・・・新カリキュラムの導入に合わせて、2014 年 4 月に CALL 担当の専任教員（年俸制で任用期限付の助教）が採用された。この教員は専ら CALL 科目の運営と単位認定を業務とし、原則として対面授業の担当はなく、いわゆる雑用も原則としてない。

8・・・CD は監督教員によって CD ラジカセもしくは教室に装備されている AV システムで再生される。

9・・・2014 年度前期は初めての定期試験実施だったため、他の英語科目に定期試験時間帯を譲ってもらって実施した（その科目の試験は授業期間内に実施してもらった）。しかしこの方法では、各曜日 5 限に実施する場合と比べて、問題の種類を余計に準備しなければならない、監督者の人員が余計に要る、他の科目の授業回数を 1 回分犠牲にしてしまう、追試験を実施する場合に「他の英語科目」と重複する恐れがある、などの問題があったため、後期からは各曜日 5 限での実施へと変更した。

１０・・この語彙表現集は、『九州大学教育の質向上支援プログラム』の支援を受けた「九大英語語彙表現集作成プロジェクト」のもとで編集された。基幹教育の間に習得すべき語彙や表現を丁寧に選定したもので、綿密なネイティブチェックを経た例文（コロケーションを示すもの）とその読み上げの MP3 音源が付く。語彙、句動詞、表現の 3 部構成で、句動詞は基本動詞を軸にしたもの、表現は大学での学業生活に役立つものを集めている。筆者のひとり鈴木もこのプロジェクトの一員であった。

１１・・TOEFL-ITP でなければならないという絶対的な理由はないが、全員が同じ種類の試験を受ける必要はある。実施を容易にするために、所要時間が授業時間内に収まるテストを利用する可能性もある。また、他の国際検定試験の利用も可能性があろう。

１２・・2014 年度後期の一部ブロックで教材の一部を先行試用した。

１３・・リスニングで Elllo サイトから転用しているものに関しては、九州大学内での利用に留めて、共有はしない。

１４・・http://www.lessonpaths.com/learn/i/the-best-websites-for-developing-listening-skills/elllo-english-listening-online にあるものが Elllo サイトで、Todd Beuckens 氏による興味深いフリーの英語学習サイトである。

１５・・WebOCMnext の現在の姿については次のサイトを参照されたい。

http://www.mle.cmc.osaka-u.ac.jp/webOCMNext/

参考文献

九州大学英語表現ハンドブック編集委員会（徳見道夫監修、田中俊也、江口巧、大津隆広、鈴木右文、Stephen Laker 編）（2014）『九大英単　大学生のための英語表現ハンドブック』研究社.

鈴木右文（1998a）「CALL 教室におけるコンピュータのセキュリティについて　―九州大学を例に―」『英語英文学論叢』（九州大学英語英文学研究会）第 48 集、1-16 頁.

鈴木右文（1998b）「CALL システムによる外国語教育とその諸問題　―新規導入した九州大学の場合―」『言語文化論究』（九州大学言語文化部）第 9 号、161-72 頁.

鈴木右文（2007）「九州大学の英語新カリキュラムと CALL 科目の導入」『言語科学』（九州大学大学院言語文化研究院言語研究会）第 42 号、1-11 頁.

鈴木右文（2008a）「大学英語カリキュラムでの大規模自律学習の展開　―九州大学の場合―」『英語英文学論叢』（九州大学英語英文学研究会）第 58 集、11-20 頁.

鈴木右文（2008b）「大学英語 CALL 授業での自律学習における受講者の行動」『言語科学』（九州大学大学院言語文化研究院言語研究会）第 43 号、87-93 頁.

鈴木右文（2009a）「大学横断的外国語ｅラーニング支援の展開」『英語英文学論叢』（九州大学英語英文学研究会）第 59 集、31-40 頁.

鈴木右文（2009b）「CALL でのコンスタントな英語自律学習と試験結果との関係」『言語科学』（九州大学大学院言語文化研究院言語研究会）第 44 号、83-92 頁.

鈴木右文（2011）「ウェブ上の自律学習による英語演習の展開　―九州大学英語 IIB・IIIB における「ぎゅっとｅ」―」『大学教育』（九州大学高等教育開発推進センター）第 16 号、109-123 頁.

鈴木右文（2012）「英語科目の好成績をもたらすもの　―ぎゅっとｅの実践を通して―」『英語英文学論叢』（九州大学英語英文学研究会）第 62 集、39-49 頁.

鈴木右文（2014）「大学英語教育の目指す方向　―九州大学の新英語カリキュラムの狙い―」『英語英文学論叢』（九州大学英語英文学研究会）第 64 集、19-35 頁.

鈴木右文（2015 予定）「授業時間を廃した英語科目における学習行動」『英語英文学論叢』（九州大学英語英文学研究会）第 65 集.［本稿が公開されるまでには刊行される］

細谷行輝（2008）「e-Learning の考え方」『e-Learning 教育研究』（e-Learning 教育学会）第 3 巻、38-41 頁.

細谷行輝（2010）「外国語教育用ソフトウェアについて」『e-Learning 教育研究』（e-Learning 教育学会）第 5 巻、35-39 頁.